

「酒呑童子」伝説と鉄砲・金属産業の信仰

— 『童子百物かたり』を中心に —

西座 理恵

はじめに

新潟県は「酒呑童子」の伝説が多く伝わる地域である。国上寺に伝わる伝説では、弥彦神社で大大神楽を演じる美しい稚児の外道丸が、女性からもらった多くの恋文の執心から鬼に変化して酒呑童子になる。一方、『岩室村史』（表7）には、酒呑童子の母親が妊娠中に禁忌とされる魚を食べたとある。『越後野志』（表15、16、17）、『温故の栞』（表11、12、13）には酒呑童子と茨木童子が共に山や岩窟をすみ家としていた、奇術に長けていた、奇怪なことを好む乱暴者であった、酒呑童子の生家や童子田と呼ばれる田があったと記されている。このようなバリエーション豊かな「酒呑童子」伝説は、新潟県だけでなく岩手、山形、福島、長野県、北陸の地域にも伝わっており、分布する地域によって話のタイプに違いが見られる。

京都府の大山山付近では、源頼光の酒呑童子退治を中心にし

た「酒呑童子」伝説、滋賀県の伊吹山周辺では、御伽草子「伊吹童子」で酒呑童子の父とされる伊吹弥三郎の伝説がある。

同じ「酒呑童子」について語る伝説でありながら、神楽を演じる艶やかな美少年から、岩窟に住み、奇術を使い、人肉を食す童子の話にいたるまで、伝説で表現される「酒呑童子」像は様々である。新潟県の国上寺に伝わる「酒呑童子」伝説については、弥彦神社で行われる大大神楽において、国上寺の山伏と稚児が八講を担っていたという史実を中心に拙稿で述べた¹⁾。本論では、「酒呑童子」伝説に関する先行研究を参考にしながら、関東から北に伝播する「酒呑童子」伝説の諸相を三つの型に分類して、話の伝播状況を検討する。そして吉田綱富『童子百物かたり』の歴史的背景、作品にみられる信仰をもとに山形県と長野県の「酒呑童子」伝説について考察していきたい。

一、「酒呑童子」伝説の諸相

「酒呑童子」伝説の特徴は、童子が酒呑童子となったきっかけや出生にまつわる話、生来の性質などが、鬼退治の話と融合して語られる点にある。例えば、新潟県国上寺の「酒呑童子絵解き」で酒呑童子の話が語られる際には、書承で有名な酒呑童子退治の話と共に外道丸の伝説が語られた。（「国上寺ものがたり」くがみ山国上寺）

新潟及び北陸、東北地方に伝わる「酒呑童子」伝説は全体的話数は多くない。互いに類似する話もあるが、独自のモチーフを含むものも多く、一話一話が個性的である。伝説の分布する地域とその内容についてみると、地域的な偏りがみられる。そこで「酒呑童子」伝説をA、B、Cの三つのタイプに分け、その内容と特徴を表に作成した。分布状況については本論で言及する。本文中の資料の出典で表中に明記されているものは、重複を避けるために表番号を示して注での明記を省略する。

1、「酒呑童子」伝説A

書承の「酒呑童子」の物語を中心に、御伽草子の「羅生門」、昔話の「猿神退治」「化物寺」など、他の話と融合する傾向が見られるものをAタイプとする。例えば、新潟県柏崎の伝説（表2）では、昔話「猿神退治」で生贄を食へにくる猿に代わって酒呑童子がやってくる。その後、侍に腕を切り落とされて逃げていくが、

後に腕を取り返しに来る。この話は御伽草子「羅生門」「弥三郎婆」の伝説にみられる。また福井県の伝説（表4）では、お伽草子「土蜘蛛草子」との融合も見られる。Aタイプの伝説では、書承の物語や昔話、他の伝説が重なり合って「酒呑童子」伝説となっている。Aに分類した伝説は表中6例で新潟県内にも2例あり、富山、福井、島根県の日本海側と群馬県に伝承されている。書承の内容との融合を考慮すると、近世期の都市における出版文化が地方の語りに影響しているのではないだろうか。収集した話の中に一つとして同一のものがなく、主に日本海側地域に伝わる点については考察の必要があるが、本論では書承の影響を指摘するにとどめたい。

2、「酒呑童子」伝説B

子供時代の酒呑童子の性質について語るもので、童子は産まれた時から話すことができたり、歯や髪の毛があつて異常出生ゆえに恐れられる。育つに従って手のつけられない悪童になり、悪行ゆえに家から追い出されて山に捨てられたり、寺に預けられたりする。その他にも人肉を食べる、酒を飲むと全身が赤くなる等の特徴が見られる。表では7、8に酒を飲むと全身が赤くなる、表17では生まれてすぐ歩いて話すなどの性質が見られる。これらの伝説をBタイプに分類する。お伽草子「伊吹童子」では伊吹弥三郎と大野木殿の娘との間に生まれた伊吹童子、「弁慶物語」の弁慶にもこうした性質がみられる。

これらの主人公は、成長すると身体が鉄からなる鉄人へと成長する。伊吹弥三郎は唯一の弱点が脇の下であり、平将門も眉間以外は総身が鉄であったとされる。古浄瑠璃「酒典童子若杜」⁽²⁾では、越後の寺泊の稲瀬善次俊綱の子供である悪童丸は背が高く、髪は乱れ、目は火焰のように燃えており、腕の毛は針をうえた銅のようであると表現されている。悪童丸は戸隠明神の申し子で、黒鉄の大蛇が胎内に宿って出生した。母親は懐妊の折、五穀を食さずに黒鉄を食して、悪童丸は三年三月も胎内に宿っていた。このような描写も鉄人伝説とのつながりをうかがわせるものである。

『鉄人伝説・鍛冶神の身体』⁽³⁾では、この鉄人伝説が金属精錬とかわりの深い地域に伝承されていることから次のように記されている。

鉄や銅の精錬に従事した工人たちは、採鉱から加工にいたる技術や安泰の守護神として、鍛冶神、天目一箇神や三宝荒神や金屋子神を信仰した。竜神・竜蛇神などを祀り、豊かな水源の恵みを願う水神への民間の祈りは、自然界から原材料を採取したり、精錬の過程で白熱化した火を扱ったりする工人たちにとっても欠くことのできない大切な日課であった。

宮本正章「大江山伝説」成立考⁽⁴⁾では、大江山の西南にある御岳山の麓の福知山市に伝わる「酒呑童子」伝説について、書

承の酒呑童子退治の話との関連だけでなく、銅鉱があつて金屋・山師とよばれる人々が存在して彼らが鬼にたとえられたという地域的な背景にも言及している。

若尾五男「酒呑童子伝説」⁽⁵⁾では鬼と金工にはつながりがあつて、酒呑童子が切り殺されたという旧七月十五日には、大江山の麓では鎌止といつて、一日鎌を使用することを忌む慣わしが明治初年まであつたと記されている。また大江山に近い三岳山は、源頼光が酒呑童子退治へと赴く途中に山伏姿で登った山であり古い銅山があつて、採訪の時に鉱滓のかたまりを見つけることができたと述べている。

新潟の「酒呑童子」伝説と鉱山、鍛冶との関連については、谷川健一が「弥三郎婆」⁽⁶⁾において多角的に検証している。新潟の国上山に伝わる「酒呑童子」伝説では、酒呑童子は国上寺の稚児で、弥彦神社の大大神楽を演じる稚児である。谷川は弥彦神社の神が片目であるという伝説に注目し、国上寺の稚児が弥彦の祭祀に赴いた三月十八日について、その祭礼日が金属や片目の神を祀る日であると指摘している。また伝説において「三郎婆」が鍛冶屋の母であること、弥彦の神が鍛冶屋と関係の深い雷神を折伏したことを挙げて、伝説の背景には鉱山や鍛冶産業が盛んな地域性があるとして、次のように述べている。

おそらく、海路をへて越後の寺泊の北に上陸した鍛冶技術の集団が、弥彦山塊の自然銅を採掘していた。彼らの奉斎す

る目一つの神は雷神を制圧する鍛冶の神にほかならなかった。古代においては鍛冶集団は、安産の呪術を持つと信じられていた。狼もまた安産の守り神であるということから鍛冶屋の老母と狼とを同一視する伝説が生じた。それが千匹狼の話にほかならないが、弥三郎婆の伝説の原型もそこにあると私は推測する。そして弥三郎婆と酒呑童子の出生地のむすびつきが偶然でないとするれば、酒呑童子の物語にも鍛冶の伝承が反映しているとみななければならない。

鉄人として「酒呑童子」が表現される伝説は、関東以北では新潟県の弥彦に集中しており、他地域では岩室村にも伝承される。それは弥彦や岩室村が、金属の産出や産業に関わる地域であることと関係するであろう。例えば、『弥彦村史事典』⁸では「弥彦銅山一件」で、弥彦山の周辺に石瀬、間瀬、八前などの銅山があり、近世期にはその鉱脈の試掘願いを出した人々と、鉱毒を恐れた百姓側及び弥彦山を明神の敷地と考える弥彦神社側との間で対立があったと記されている。また岩室村資料館では地域の産業として石瀬の三富家から寄贈された鍛冶道具の展示があり、鞆、火床、金床などを見ることができる。Bタイプの伝説が伝わる地域の自然や産業の実情は、谷川が指摘するように「酒呑童子」伝説が鍛冶の伝承を反映する論拠の一つになり得るだろう。

このタイプは表において口例あり、新潟県の弥彦の9例、岩室村、中蒲原郡村松に一例ずつみられる。

3、「酒呑童子」伝説C

三つ目に挙げるのは酒呑童子が男女の恋愛と関わる伝説で、これをCタイプに分類した。三つのパターンがあり、それぞれの話に他の伝説との融合がみられる。Bタイプの伝説が鬼子、鉄人というような荒々しい「酒呑童子」像を表現するのに対して、Cタイプの「酒呑童子」は女性との関わりや、多くの女性から慕われて同性からの嫉妬をうける、あるいは異性を退けようとして被った面が顔から離れなくなって「酒呑童子」になるというように、想いが人を鬼にする様子が表現される。

Cタイプに分類した伝説を内容別に三つの型に分類した場合、最も多いのはC1の酒呑童子が鬼になるきっかけに艶書が介在する話である。僧侶、稚児である酒呑童子は美男子で女性に人気があり、多くの艶書をおくられる。その艶書にこめられた執心が煙や炎になり、顔にかかって鬼になる。この話の類話として、「諸国百物語」の「艶書の執心、鬼と成りし事」⁹、「菅江真澄全集」3「すみかのやま」¹⁰の青森の津軽の寺に纏わる怪異譚が挙げられ、どちらの話でも艶書に執心した稚児が鬼になる。

C2としたのは、武士や稚児が仲間から妬まれて顔に鬼の絵や鬼という字をかかれて鬼になる話である。新潟県、柏崎市には「次郎が淵」¹¹という伝説があり、女性から人気がある青年、次郎が仲間から妬まれ、川普請の際に突き落とされる。その後、天候が荒れて作物に影響するため、川底の次郎に謝罪にいくと、天候が荒れるのは人心が乱れているためであると蛇に変じて川の主に

なつた次郎は語る。また類似する話として『波多野ヨスミ女昔話集』(表22)に「次郎の砂利がち歌」がある。両話とも「酒吞童子」伝説のように、顔に落書きをされて鬼になる描写はないが、同性の妬みから異類となる部分に類似点が見られる。

C3としたのは、男性が女性を退けようとして鬼面を被ったところ離れなくなり、酒吞童子になる話である。同じく女性が異性を退げるために鬼の面を被る話として『平方と山姥 えびなちやう昔話集』(表26)「鬼の面」がある。また南方熊楠が「磯崎に就て」⁽¹²⁾というエッセイで信州青木湖付近の長者の話として紹介する、四ツ谷の明神様の三つの仮面に関する伝説も類話といえよう。この話では、武士が女性を避けるために鬼面を被って外れなくなり、鬼となつて女性を殺した。その血が桜草を染めたので、花が赤くなるという桜草の色の由来譚になつている。

Cタイプは表中10例で新潟県においては国上寺と北蒲原郡豊浦(新発田市)、五泉市にみられるが、他に岩手、山形、福島、そして長野県に一例見られる。鉄人の酒吞童子とはかけ離れた印象を与えるこの伝説は、どのような人々によつて伝播したのであろうか。

「酒吞童子」伝説のCタイプには、酒吞童子を退治する武將が登場する際、一に頼光、二に渡辺、三に貞光、四に保昌、五に金時、六に季武のように数え歌の形式をとる例が見られる。(表、18、19、20、22、26)これは警女の口説きに見られる形式である。例えば「正月祝い口説」では、一に、二に、と神仏の名前を並べる。⁽¹³⁾中でも「酒吞童子くどき」(表8)では「津川の

大石沢で川崎みさを氏が警女の語りを忠実に残して呉れている。」と述べられている。C2の類話として挙げた「次郎が淵」⁽¹⁴⁾「次郎の砂利がち歌」も、警女の口説き「次郎さ口説」に歌われる。C3(表26、27)の鬼面不離の「酒吞童子」には、警女歌との関わりは見られなかったが、C1、C2の伝説は警女が伝播に関わつていたのであろう。

表C3の「酒吞童子」伝説は、表26の山形県白鷹町、表27の長野県下水内郡栄村の2例である。酒吞童子が仮面不離モチーフと関わる理由については現在のところ不明であるが、同じ系統の伝説が山形県白鷹町と長野県栄村にみられる理由とその背景については、次章からの考察で明らかにしていきたい。

二、吉田綱富『童子百物かたり』について

「酒吞童子」伝説が山形県で語られていたことを伝える資料として、「童子百物かたり」⁽¹⁵⁾がある。『現代語訳 童子百物かたり』⁽¹⁶⁾「はじめに」によると、吉田綱富は米沢藩の猪苗代組という下級藩士の家に生まれたが、学識が認められて寛政三年(一七九二)に藩校興讓館の学館役方に任じられ、文政三年(一八二〇)には御馬廻組に入つて九代米沢藩主、上杉鷹山に仕えた。

「五十 酒吞童子のこと」は、作者が赤湯温泉で湯治をした際に、安摩坊の弥陀都を招いて三男の八郎に「酒吞童子」伝説を語り聞かせるといふ形で記されている。赤湯温泉は米沢駅から

白鷹町にむかう道程三分の一ほどの距離にある。一章において「酒呑童子」伝説を内容別に分類したが、この伝説には頼光の酒呑童子退治の話以外に、僧たちの肉に噛みつき鬼児（おにぎ）として恐れられたというBタイプの特徴、女性からの恋文の執心で容姿が変化するC1の特徴もみられる。また、作者自身が赴いた砂子塚の「童子屋敷」、見聞した「童子の柿の木」「国上寺から去る童子」の伝説も記されている。

或説に、酒呑童子が生国は越後の国の由。新潟より十里余り西南、八彦山の南に当て、与板海道山際に、砂子村と云小村有り。此村の入口西の方に、童子屋敷と云て、此屋鋪へ家作する者一代切にして、家作する者なく荒屋敷也。柿の古木有り。むかしより童子が柿と云伝え、いまだ青柿の内に、一夜童子が来り候とて、翌朝みれば、青柿散くにもぎ落し、木下に青葉散り候して有の由、申伝候よし。童子登山の国上寺は、八彦の西南山の中程に、大杉立にみゆる大寺に而、勤寺の由。童子此寺を追出され、立除時、名残をしさに、立戻りくしたる坂、今に、童子が戻り坂とて有り。其外、色々此寺に童子か由来、形見杯有の由。予、文化十年十一月中、与板に罷越候得し。此所を通りける時、駕籠之者、「是が酒呑童子屋敷に候」と教しえ候。村の入口に而、藪原の荒屋敷にみえ候得し。此砂子塚村家数も纔に而山際なり。鹿取村に見え候得し。

『現代語訳 童子百物かたり』では、吉田綱富が「童子屋敷」を見たという文化十年十一月の越後与板への訪問について、『綱富一代記』から次のように紹介されている。

文化（十）年十一月十七日、九郎兵衛殿御達ニ、越後与板三輪九郎右衛門病死二付、御尋御使者被仰付、同廿一日出立、無滞相勤、閏十一月十五日帰着致候得し。

但、同心一人、鎧持一人、小者一人、上下四人。同心二佐藤孫次、鎧持山崎部、小者二和田名助子留藏

ここから、作者は与板に住む三輪九郎右衛門が亡くなり、甲問の使者として従者と共に米沢から越後の与板へ行き、その帰路に酒呑童子の家を訪ねたことがわかる。

米沢藩九代藩主、上杉鷹山が藩主になった頃、米沢藩は窮乏状態にあった。『与板町史 通史編 上』によると与板の豪商、大阪屋三輪家は鷹山の緊縮財政政策を財政面で支えた商家であった。米沢藩への多額の貸付による功績で、三輪飛兵衛には天明六年に、扶持米二五石が給されている。米沢藩が吉田綱富を三輪家の葬儀のために与板まで遣わしたのはこのような事情によるであろう。

次に、米沢藩と越後与板とのつながり、与板を本拠地とする与板衆と吉田綱富との関わりについて述べたい。

1、米沢藩と与板衆

直江兼統は戦国大名上杉家の家臣で、与板城主直江山城守兼統として知られ、新潟県の与板を本拠地としていた。上杉家は慶長三年に、豊臣秀吉の命によって会津へ移封となる。主君である上杉景勝が会津一〇〇万石に転封したため、直江兼統も三〇万石で米沢城主となった。その当時、本拠地である与板から家臣たちを伴い重用した。¹⁸⁾

直江兼統の家臣は「与板衆」とよばれ、『与板町史 上』にも与板衆が直江兼統の家臣団であると記されている。「与板衆」の構成人員は、戦国時代から近世期にいたる時代の変遷の中で変化がみられるが、知行地の定納高をまとめた「文禄三年定納員数目録」¹⁹⁾、市立米沢図書館に所蔵される延宝五年「先祖由緒帳与板組」等の史料によって知ることができる。与板で執政中の直江兼統は、検地や蔵入地奉行、知行宛行奉行など財政・外交・軍事の権限を掌握しており、与板衆はそれを担っていた。与板衆の多くは上杉家が会津、米沢へと移封する時に供奉している。その「与板衆」について、前波善学編『与板史 こぼれ話』²¹⁾「与板と米沢」では次のように述べられている。

与板組の多くが武者者であり、特に鉄砲関係に重きを置いたことである。このことは、直江氏が与板在城のころ、舟戸丁に鉄砲鍛冶をおいたと云い伝えられるのに照合するらしいが、それはともかく、大筒組、与板鉄砲組をはじめ、種子島流鉄

砲大将丸田九左衛門、稲富流鉄砲大将大熊美登美はいずれも与板組で、おのおの古流宗家として門戸を張って居た。

ここには与板衆と鉄砲の流派、鉄砲鍛冶との関わりが記されているが、与板衆の史料「先祖由緒書 与板組」には種子島流鉄砲大将「丸田九左衛門」の名がある。『米沢市史 2』の「5 武術と鉄砲」によると、米沢藩には「稲富流」「田付流」「種子島流」という三派の鉄砲術が導入されていた。その中の「種子島流」に関して次のような記述がみられる。

種子島流の祖は丸田九左衛門盛次である。信州の出身で、武田氏の旧臣である。大坂で片桐左近少輔につき種子島流を学んだ。慶長九年、鉄砲総支配を命じられ、また後述のように同年白布高湯で行われた鉄砲一〇〇〇挺張り立ての総監督も兼帯した。寛永三年、鉄砲足軽五十人の組頭となり、同五年死去した。

ここに記される種子島流師範の丸田九左衛門と吉田家について次に述べたいと思う。

2、吉田家と北信濃の鉄砲衆

『童子百物かたり』には、吉田綱富から五代前の先祖である吉田藤左衛門とその弟の次左衛門、吉田一無のエピソードがみられる。第七話では、藤左衛門は会津より引越してきた者で、

正保年中に丸田の三十目筒の鉄砲の打ち手として大きな功績を建てたため、代々並みの扶持より多くもらっていたと述べている。「丸田」というのは、先に挙げた種子島流の丸田九左衛門のことである。また第九話においても、壮年から一無が丸田へ入門して鉄砲五十目筒を長年打ってきたと記されている。これらの関係から、吉田綱富の先祖や親戚が与板衆の種子島流鉄砲師範の丸田家に師事して鉄砲を扱っていたことがわかる。

『上杉御年譜二十三』²³で吉田一無の先祖をたどると、次左衛門という名前があり、やはり丸田九左衛門に師事して鉄砲を学んでいる。この次左衛門の三代前の「吉田源左衛門」は越後の妻在出身、会津へ供奉したとある。新潟県の妻有は、新潟県南端、長野県との県境に近い地域を指す。越後国妻有荘をめぐっては、西川広平の戦国大名武田家と市河家²⁴において上杉家と武田家が領地争いを繰り返しており、それに伴って在地の地侍が上杉家や武田家の家臣となって土地を安堵されていたと記されている。吉田家の菩提寺は米沢の常慶院であるが、常慶院は長野県下水内郡栄村に市川家（市河家）が建立した寺院で、上杉家の移封に従って米沢に移った。吉田藤左衛門が師事したという丸田九左衛門、市川家も武田家から上杉家の家臣となって米沢へ供奉した北信州出身の武士であった。常慶院、市河家、そして鉄砲師範の丸田との関係を考えてみると、吉田家も同じように北信出身の武士であった可能性が高い。

先に「与板組」に武芸者や鉄砲関係者が多かったという指摘を引用したが、村石正行「直江兼続と信濃侍」²⁵「三、与板衆と信

濃侍」では、「兼続は鉄砲製造に力を注いだといわれ米沢に鉄砲屋町を建設したことはよく知られているが、そのもとで信濃侍が火器取扱を請け負っていたことはあまり知られていない」とある。村石氏の論考によると、北信濃地域では上杉家、武田家が争いを繰り返していたが、天正十年に武田家が滅びて、本能寺の変がおこると対抗勢力のなくなった北信濃では、上杉家への出仕が相次いだという。そして直江兼続が信濃の武士を配下において、その火器技術や鉱山技術、鉄砲の買い付けルートを活用していたことを書状などから明らかにしている。

また井原今朝男「高井地方の中世史（六）下」²⁶の「5 北信濃鉄砲衆と岸和田流鉄砲伝書」では、長野市七二会地区の守田神社に残されていた岸和田流鉄砲伝書が天正年間から元和年間に書かれた日本最古のものであり、守田神社が戦国期に「モリ夕明神」と記された修験道であったこと、江戸時代初期に兼続家臣で与板衆の尾崎孫十郎の子孫が岸和田流鉄砲伝書の写しを所有しており、修験と深く関わっていたこと、北信濃の修験道と鉄砲が密接な関係にあったことを指摘している。

吉田綱富が与板に赴いて酒吞童子の屋敷を見たり、酒吞童子の言い伝えを『童子百物かたり』に記した背景には、常慶院を菩提寺とする市川（市河）氏と同じく、吉田家も北信出身であり、与板衆の鉄砲師範である丸田に師事していたこと、北信州地域の地侍や修験が鉄砲を扱うための火器や鉱山、金属を扱う技能を備えていたことから、「酒吞童子」伝説と関わりをもって

いたからではないだろうか。

仮面不離のモチーフを含むC3タイプの「酒呑童子」伝説も長野県栄村の極野（にての）に伝わっている。栄村は明治8年の堺村合併まで、旧志久見村に属す小字であった。志久見郷は常慶院があつた場所であり市川氏の所領であつた。

また長野県中野市片塩村の堀内家に所蔵されていた『湯殿山道中記』⁽²⁷⁾では、その道中に「常慶院」「定正院」と共に、「酒呑童が兎に上りし寺也」として徳昌寺という寺院が記されている。上杉定正の院号を寺名とした長岡市の定正院、直江家の菩提寺である与板町の徳昌寺を訪ねたが、「酒呑童子」伝説との関わりは不明であつた。中野市片塩村の堀内家は「史料紹介『湯殿山道中記』」を執筆した高木氏から「裕福なお百姓」とうかがつている。この地域は近世期に幕領になるまでは、直江兼統の臣下である高梨頼親の所領で、高梨氏も直江兼統に鉄砲衆を斡旋していた。⁽²⁸⁾徳昌寺は「文禄三年定納員数目録」で「与板衆」と記されているため、「酒呑童子」伝説が北信地域で「与板衆」と共に記憶されていたのかもしれない。

このような史料から、「酒呑童子」伝説が北信地方の鉄砲、火器、鉦山の技能を持つ人々の間に伝承されていた可能性が推測される。

三、風神と鍛冶

一章でBタイプに分類した「酒呑童子」伝説の背景に、金属

産業や鍛冶との関連が指摘されていることについて述べた。そのことに関連して、「五十 酒呑童子のこと」では、酒呑童子が来ると強風が吹くという興味深い話が記されている。「その夜は、きわめて風雨の強い大風であるという。今も秋の盛りに大風があれば、「今年も童子が来た」と言つて、翌朝みると、青柿がさんざんにもぎ落され、木の下に青葉が散乱しているとのことである。申し伝えている」という。鍛冶と大風の関係について、谷川健一は「伊吹の弥三郎」⁽²⁹⁾で次のように述べている。

近江の国にも、美濃尾張の国にも、つとに知られてきた伊吹山の猛風は、鍛冶の神の贈り物であつた。私はかつて岐阜県不破郡垂井町にある南宮神社の宮司の宇都宮さんに、次の話を聞いたことがある。伊吹おろしと呼ばれる西北風が吹きまくる冬には、むかしはたたらを風の方に向けておくと、足でつよく踏まないでも、風が炉に入つて炭をおこすことができた、と铸物師仲間であつたという話である。伊吹山の周辺に古代からこの風を利用して銅や鉄を精錬する人たちが住んでいた。(略)

琵琶湖のほとりにある草津市の志那のあたりでは、北東の風がつよく吹くことを「今日はいブウヤ」というと、地元の人に聞いたことがある。昔の近江の人たちは、伊吹山の強風を弥三郎の伝説にひっかけて、弥三郎風と表現したものと私は考える。伊吹の弥三郎は鍛冶神の化身であり、鉄人であつたが、たいへんな乱暴者であつたという伝説から、鍛冶に必

要な伊吹山の猛風とのつながりが生まれてくることになる。そこで伊吹山の猛風を弥三郎風と呼んだ。

農業を営む人々にとって暴風は大敵であり、雨乞いと共に風封じを願う祭礼も行われてきた。しかし、銅や鉄の精錬を営む人々にとっては、大風が恵となる一面もあったようだ。鍛冶の神が風をおこすという言い伝えは他にも見られる。斎藤嘉吉「鍛冶職より聞いたあれこれ」⁽³⁰⁾「金山講（ふいご祭）について」にも「十二月八日の日に降子が天から降ってきた。それで「ふいご」を使う、鍛冶、鋳物師は、この日にふいご祭を行なう。又この日には風が吹いて荒れると云」う。

第五十話において作者が書き記した、酒吞童子の到来と共に大風がやってくるという言い伝えは、近江で吹いた大風が弥三郎風と呼ばれたことから、酒吞童子と鍛冶神との関わりが示唆される。また『童子百物かたり』の第二話「大雷のこと」、第二二話「狼のこと」に出てくる雷や狼も谷川健一によって鍛冶の伝承を反映していると指摘されている⁽³¹⁾。

四、『童子百物かたり』の「狐」むかしと鍛冶の稲荷信仰

二章一節では、吉田家に鉄砲を扱う人々がいたことに触れて、その種子島流の師匠が与板衆の丸田九左衛門であり、与板衆には鉄砲関係者が多いことを指摘した。与板衆には「文禄三年定

納員数目録」に「御鍛冶奉行集 一、百石 鉄砲屋 本五郎」とあることから、鉄砲鍛冶がいたことも確認できる。『米沢市史 2』では、上杉景勝が領内舟井村（北蒲原郡船井村か）で鉄砲を製造し、百挺鉄砲組も編成して、天正十四年（一五八六）には新発田重家との戦闘のために越中から唐人丹後守広を招き、鉄砲の早込めの指南にあたらせたとある。

新潟県の与板は金物産業が盛んな土地で、『与板町史 上』では直江景綱が春日山城下から刀剣師を招いたことに始まるとある。岩方という場所には製鉄遺跡もあり、長岡科学博物館によると田に作物のない春先にはその痕跡が見られるそうである。

『与板町史 民俗篇』⁽³²⁾の鍛冶の信仰において興味深いのは稲荷信仰であり、次のような話がみられる。終戦前は、元旦の日は鍛冶屋は休みであったが二日は「起き初め」といって仕事始めであった。新しい「起き初め」に造るのは剣と小さい鎌で、それは稲荷の御神体だという。また鞆祭りも稲荷大明神と関係があり、「十一月八日は本県の金物業者も仕事を休んで鞆祭りを行う。これは山城国紀伊郡稲荷大明神で行なう火燈の神事である。」と記されている。

二〇一九年八月に、与板の渡徳工業で「ふいご祭り」について次のような話を伺った。与板の町は、金物産業が歴史的に盛んであったが金山神社がなかった。そこで都野神社に五、六十年前に金山神社を作ってもらい、十一月三日頃にふいご祭りをしていた。その神社は元は船を祀る神社であった。ふいご祭りを行っていた金山講は平成二十八年に解散したが、現在でも十一

月の第一日曜日に御被いを行つてゐる。ただし、白装束ではがねを打つたりはしていないとのことである。

与板町の金山神社の歴史が新しいのは、与板における金物信仰の中心が稲荷信仰だったからではないだろうか。『与板町史上』には、与板で金物産業を創始したと伝わる直江家が城山稲荷神社（現、与板城跡）に「包丁刀」を奉納したと伝えているが、都野神社にある金山神社の脇に分祀が祀られている。『与板町史 民俗篇』では、与板鍛冶の間で稲荷信仰が盛んな理由について、鞆に狐の皮を使用したことに触れつつ、「大陸から伝来の陰陽五行説や十二支などの影響を含んだ原始宗教の一種で、おそらく風神信仰の発達したものでなかるうか」と考察して、その諸相を次のように記している。

現在、鍛冶関係業者を中心に行われている鞆祭りが御神体と称する鉄製器物のほかに、神としては稲荷を祀っている理由もこのような考え方からみちびきだせるのである。「人倫訓蒙図鑑」（一九六〇年刊）によれば「鞆は京童の説に稲荷の神が天上よりもたらしたもの」と言う伝えもある。寛延四年発刊の「江戸年中行事」によると「十一月八日鞆祭りこの日鍛冶、鋳物師、白銀細工すべて鞆を使う職人、稲荷の神をまつり、俗にホタケと言う。ホタケは火焼也」とあって稲荷信仰に由来いわれているような農業や商業の神とは違った一面があることを説いている。そして五行説や鉄冶金と強く結びつくと、出雲の製

鉄神、金屋子神、となつて現れるものであるといふ。⁽³³⁾

このような鍛冶と稲荷信仰の関係を踏まえると、「童子百物かたり」の「一金花山常慶院、狐の釜のこと」「二、高玉村瑞龍院、狐のこと」の二話は、孫にせがまれて語る「狐」むかし以上の意味合いを帯びてくる。この両話では、世間話にみられるような人をだます狐ではなく、神の眷属として狐が描かれている。

二話の舞台となる常慶院と瑞龍院は末寺と本寺の関係にあたる。常慶院は先にも述べたように北信濃出身の市川家、吉田家の菩提寺で、現在は米沢市と長野県栄村にある。瑞龍院は山形県白鷹町にあり、近世期の白鷹町は米沢藩の所領であった。瑞龍院は「稲荷山 瑞龍院」と称し、朱の鳥居の稲荷神社が祀られている。現在は無住寺であるが、その敷地は大変広大で名刹であったらう。

『童子百物かたり』の一話目は、常慶院の寺宝「文福茶釜」に由来する伝説であるが、常慶院のパンフレットによると「寺宝「文福茶釜」は、約千数百年前の古代中国製で、貢物として朝廷に献上され、將軍家より大名上杉家に渡り、謙信公御愛用として、二代景勝公の従兄弟である当院九世本悦和尚のもとに伝えられた。」とある。

第一話で九代日本悦和尚は、弥八郎狐が京都に位をもらいに行く時に巻物を預かる。その間、常慶院は数々の怪異に見舞われ、巻物を狙う輩に弓や鉄砲まで打ち込まれる。しかしそれらは狐であり、鉄砲と思ったのは小さな石つぶてであった。巻物

を守った御礼に、弥八郎狐は京都の古道具店で見つけた釜を置いていく。その釜は神器で、飯や粥を炊いて疫病や瘧の病人に与えると全快させることができるという。この和尚は雨乞いに優れた力を持っており、市川殿から出た僧であるとも述べられている。狐の釜は後に、下長井高玉村（白鷹町）で疫病が流行した時に、瑞龍院が釜を借りて供御を炊き、疫病退治の祈禱をして病人に食べさせたところ、著しい効き目があった。また瑞龍院は常慶院の本寺で、後には弥八郎狐の子孫が瑞龍院の狐と同居したという言い伝えも書き添えられている。

常慶院では、住職が狐の釜の紙芝居を語り聞かせてくださり、狐の釜も拝見させて頂いた。鉄製であるため底は既に錆びているそうである。本堂の脇の部屋に市川家の代々の位牌が祀られていた。印象的であったのはその裏の部屋に神棚があって、伏見稲荷が祀られていたことである。

二話目の高玉村瑞龍院の狐の話にも格別な狐が登場する。仕事で高玉村に訪れた作者は、休憩のために瑞龍院に立ち寄ると、住持の代わりに三十歳くらいの長老が出迎える。作者はこの長老を「伊賀の国」の者であると記している。作者のリクエストで瑞龍院の狐が披露されるが、その狐は「御稲荷」（おとうか）と呼ばれている。瑞龍院の狐は食べ物をもらう順番を守り、食べ物に不浄な火がまじると食べない。長老が語るには、飯炊きが指を切った手で握ったお供えを狐が拒否し、火を清めて新たに炊いて供えると食べたという。また瑞龍院は、住職の品行が悪いと夜中に枕

返しにあつて勤めることができないという格別の霊地であり、末寺が奥羽に五百八もあると記されている。

『童子百物かたり』の八、十、十三、十六、十八、十九話は、狐やカワウソウが人を化かす世間話のようであるが、常慶院の狐は人を病から救う鉄の釜をもたらし、瑞龍院の狐は明確に「御稲荷」と記されて不浄のものを食べない高尚な狐である。三十五話でも猪苗代衆が女性に化けた狐を打とうとするが、狐の霊力で鉄砲の口火が立ち合わず、エサに仕掛けた油鼠が取られてしまう。四十五話では、飯綱の法を修めた家系の人が弘法大師に化けた獺のいたずらを見破っている。

『童子百物かたり』を通して語られる「狐むかし」は子供に語る昔話、単純な世間話という装いの裏に狐の霊力を強調する側面もみられ、常慶院や瑞龍院に伏見稲荷が勧請されていることを考慮すると稲荷信仰との関わりが考えられる。また与板鍛冶を始めたと伝えられる直江家が城山稲荷神社に奉納した包丁刀が象徴するように、与板町の鍛冶職人は稲荷信仰を重んじた形跡があり、本書で描かれる「狐むかし」は、稲荷信仰と金属産業との関わりを表現するものとして捉えることができるのではないだろうか。

まとめ

先行研究において「酒呑童子」伝説には、鉾山や鍛冶産業と

の関わりが指摘されており、新潟県の弥彦村や岩室村にみられる酒吞童子には鉄人の性質が備わっている。一方、新潟や東北地方には執心や妬みといった心の鬼と関わる「酒吞童子」伝説がみられる。本論ではこれをCタイプに分類し、C1、2の話と警女歌との関わりを指摘した。しかしC3に分類した仮面不離譚を含む「酒吞童子」伝説には、警女歌との関わりが見られなかった。

次に山形県における「酒吞童子」伝説を記す『童子百物かたり』の記述を元に考察を試みた。『童子百物かたり』の作者、吉田綱富は自身の家系に鉄砲で賞与を受けた人物がいたことについて言及している。米沢藩で鉄砲を扱った中には、与板衆と呼ばれる人々が多かったが与板出身者に限らず、火器を取り扱う北信の武士たちも含まれていた。「文禄三年定納員数目録」によると、北信地域の多くの地侍が与板衆になっているが、その構成人員は元武田の家臣、所領安堵のために上杉家と武田家双方との関わりを維持した地侍にいたるまで様々であった。彼らは土地の安堵や生き残りをかけて、時流を読みつつ主君を選ぶ必要があった。兵農分離が完遂される以前の土豪、農民は農業に従事する一方で戦闘にもものぞむという未分離な部分があり、土地を中心に共同体のつながりを保っていたと考えられる。そのような共同体の特性は、鉾山や火薬の調査の知識、鉄砲に関する技能、材料を得る土地にあったと推測されて、金属産業と関係の深い「酒吞童子」伝説は職能者のアイデンティティに結びついたので

はないだろうか。鉄砲には修験者も深く関与していたようである。

C3の仮面不離を語る二話は山形県と長野県にみられ、白鷹町の瑞龍院と栄村の常慶院が本寺と末寺の関係にあったことが考慮される。栄村、米沢、白鷹町の系列寺院に諸国を行脚する僧侶や修験者の往来があつて、同じ系統の伝説が伝わる可能性はあるだろう。また、この二話には仮面不離モチーフの外に金時伝説が挿入されており、山姥と金時が登場する。山姥伝説は山の神信仰との関係が深い。C3タイプの伝説は山師の信仰や山の神を祀る面神崇、面風流などの観点からも考察する必要があるだろう。

注

(1) 拙稿「新潟の「酒吞童子」伝説―国上寺に伝わる伝説を中心に―」『草莽の口承文芸5』二〇一九 國學院大學口承文芸研究会

(2) 「酒吞童子若壮」横山重編『古浄瑠璃正本集3』一九六四 角川書店

(3) 「鉄人伝説・鍛冶神の身体」一九九七 鉄の道文化圏 金屋子神話民俗館 特別図録シリーズ2 引用は五頁

(4) 宮本正章「大江山伝説」成立考『近畿民俗』48一九六九 近畿民俗学会

(5) 若尾五雄「鬼と金工」『怪異の民俗学4』二〇〇〇 河出書房新社

- (6) 谷川健一「弥三郎婆」『谷川健一著作集5』一九八五 三一
書房
- (7) (6) 同掲書、三一八〜九頁
- (8) 「弥彦銅山一件」『弥彦村史事典』二〇〇九 弥彦村教育委員会
- (9) 「艶書の執心、鬼と成りし事」高田衛校註「諸国百物語」『江戸怪談集 下』一九八九 岩波文庫
- (10) 「すみかのやま」『菅江真澄全集3』一九七二 未来社
- (11) 「次郎が淵」酒井薫風『田尻村の話』一九七五 柏崎郷土資料刊行会
- (12) 南方熊楠「磯崎に就て」中瀬喜陽編『南方熊楠―門弟への手紙―上松翁へ』一九九〇 日本エディタースクール出版部
- (13) 板垣俊一「越後警女歌集―研究と資料」二〇〇九 三弥井書店 一五一頁参照
- (14) (13) 同掲書 六六五頁
- (15) 「童子百物かたり」水野道子編『米沢地方昔話集』一九七六 三弥井書店
- (16) 吉田綱富著、水野道子訳『童子百物かたり』二〇一九 七月社
- (17) 『与板町史 通史編 上』一九九九 与板町編
- (18) 『特別展 直江兼統』二〇一八 米沢市上杉博物館
- (19) 「文禄三年定納員数目録」斎藤秀平著『新潟県史 江戸時代篇(下)』一九六四 野島出版
- (20) 木村康裕「先祖由緒書・与板組について」『編集紀要 町史よいた』第2集 一九九一 与板町史編纂委員会
- (21) 「与板と米沢」前波善学編『与板史 こぼれ話』一九六二 与板町教育委員会
- (22) 「5 武術と鉄砲」『米沢市史2』一九九一 米沢市史編さん委員会
- (23) 『上杉家御年譜二十三』一九八六 米沢温故会
- (24) 西川広平「戦国大名武田家と市河家」『信濃』六〇巻一〇号 二〇〇八 信濃史学会
- (25) 村石正行「直江兼統と信濃侍」三、与板衆と信濃侍『信濃』六〇巻一〇号 二〇〇八 信濃史学会
- (26) 井原今朝男「高井地方の中世史(六) 戦国・織豊期の高井郡と高梨・須田氏の動静」(下)『須高』七六号 二〇一三 須高郷土史研究会
- (27) 高木元治「史料紹介『湯殿山道中記』」『高井』第一九九号 二〇一七 高井地方史研究会
- (28) 村石氏、注(25) 論文参照
- (29) 谷川健一「伊吹の弥三郎」『谷川健一著作集5』一九八五 三一書房
- (30) 斎藤嘉吉「鍛冶職より聞いたあれこれ」『高志路』二〇五号 一九六五 新潟県民俗学会
- (31) 谷川氏、注(6) 論文参照
- (32) 与板町編『与板町史 民俗篇』一九九五 与板町
- (33) (32) 同掲書、二四五〜二五五頁

参考論文

- 水野道子「常慶院蔵『金花山狐之釜縁起』」『伝承文学研究』16
一九七四 三弥井書店
- (にしぎ・りえ／國學院大學博士課程後期)

表 「酒吞童子」伝説の話型六分類

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No
10に同じ	10に同じ	新潟県西蒲原郡 弥彦村	新潟県燕市国上	中蒲原郡村松町	新潟県西蒲原郡 岩室村大字和納	島根県安来市津 田平	群馬県中之条町 六合村	福井県福井市美 山	富山県射水郡小 杉町	新潟県 柏崎市折 居餅粮	新潟県 中蒲原郡 横越町	場所
10に同じ	10に同じ	酒呑童子	清之輔	酒呑童子	酒呑童子	長者と娘の間に うまれた男の子	大江山酒呑童子	すつてん童子	酒呑童子	酒呑童子	頼光と酒呑童子	登場人物
B	B	B	B	B	B	A	A	A	A	A	A	分類
												手紙
			○									鬼になるきつかけ 艶書の顔に落書 執心 <small>一</small> きされる 不離
楞嚴寺↓国上寺↓古志郡鞋井沓。山内東稲葉の窟に隠れ住み、茨木童子と意気投合する。童子が使った器物、すみかの洞窟、などが残る。	九頭竜権現の申し子。砂子塚村南塚に邸宅があり、酒呑童子出生の旧跡である。耕地にすると奇怪があり、老樹が繁栄する。水田に童子田がある。	九頭竜権現の申し子。外道丸は楞嚴寺に預けられたがその後消息不明	現在も砂子塚に童子の屋敷が残る	酒呑童子が植えた櫻が神木になって、若宮八幡を勧請したが、社は消失。木は早出川に投げ入れられ、竹林となる。父系、母系とも断絶した	戸隠に折って授かった子、和納に酒呑童子屋敷がある	母親が乳の飲みすぎで死ぬ。乱暴者で追い出される。六部の飲み残したお茶を飲んで懐妊した子供（西行、弘法大師の伝説との融合）	鬼の前でライコウが長芋を食べて、人肉を食べるふりをする	人肉を食す。退治された酒呑童子は蜘蛛の化物となり、頼光を襲う。昔話「化物寺」	親が子供の頃、人間の形の団子を食べさせて、人を食べるようになる	昔話「猿神退治」、御伽草子「羅生門」と融合、猿神退治の物語で生贄を取りに来る猿にかわって酒呑童子がくる	御伽草子「羅生門」	備考
『温故の栞』第六編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第四編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第四編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第五編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第五編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第五編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第五編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第五編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第五編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第五編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第五編 国会アジ タルライブラリー	『温故の栞』第五編 国会アジ タルライブラリー	資料

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	
栄村極野	長野県下水内郡	山形県白鷹町	新潟県燕市国上	岩手県遠野市土淵町柏崎	新潟県燕市国上	新潟県北蒲原郡豊浦町	新潟県五泉市矢津	右と同じ	福島県南会津郡南会津町貝原	石沢	山形県小国町大	10に同じ	10に同じ	10に同じ	10に同じ
酒吞童子	器量のいい男	外道丸	男振りのいい若い侍	酒吞童子	酒天童子	若いお坊さん	下新田の百姓の与右衛門の息子	倅	しか村の権助の権助の惣領	酒吞童子	酒吞童子	10に同じ	10に同じ	10に同じ	
C3	C3	C2	C2	C1	C1	C1	C1	C1	C1	B	B	B	B	B	
	○	○		○	○	○	○	○	○						
		○	○												
○	○														
酒吞童子の血がアブやハ工になる	数え歌	大神楽を舞う稚児		酒吞童子くどき	数え歌		御伽草子「羅生門」、数え歌	手毬唄	数え歌	身長八尺、奇怪なことを好み、深い谷で五穀を断ち、キノコをたべて妖術修行をした	砂子塚村に童子屋敷と名付けた、田んぼの中の居宅の跡がある。また桜林村にもある。和納氏外塘には大きな榎樹がある。この地にも童子の居住の地とがあり、水田に童子田という名前がついている。	酒吞童子は八歳で久賀躬の侍童となったが剛勇で、奇怪なことを好む。衆に疎まれて、国上山中の東稲葉の岩窟に潜居した	雲上山国上寺の行法印に給侍していた稚児	茨木童子と共に、古志郡大平山をすみかとして横行し、奇術に長ける、童子の住居はすべて岩窟であり、真つ暗な洞穴である。頼光一行に退治される（正暦元年3月21日出生、26日に退散）	
遠野志刊行会	「酒吞童子くどき」武田正編 「飯豊山麓の昔話」一九七三 三弥井書店	「酒吞童子くどき」石川純一郎 編「会津館のむかし話」 二〇〇〇 館岩村教育委員会	手毬唄「酒吞童子」 編「会津館のむかし話」 二〇〇〇 館岩村教育委員会	語り物「酒吞童子」 「会津館岩のむかし話」	「天津の酒吞童子②」 「伝説の国むらまじ」村松町桜瀬塾 一九九四	「酒天童子」佐久間惇一 「波多野ヨシミ女昔話集」一九八五年 波多野ヨシミ女昔話刊行会	「分水町史」IV資料編二〇〇三 「酒吞童子」佐々木徳夫 「遠野の昔話」一九八五 桜楓社	山田元阿「酒吞童子」越後から 大江山へ一九九四 考古堂 「酒吞童子」武田正「平方と山姥 海老名ちやう昔話集」一九七〇	浅川欽一「信濃の昔話」第四 スタジオゆにーく 一九八一	15に同じ	15に同じ	「越後野志」(下) 一九三六 越 後野志刊行会	橋島茂世「北越奇談」一九七八 野島出版	「温故の琴」第七編 国会マシ タルライブラリー	